

《2020年1月（通算281回）月例会報告》

【日時】2020年1月28日（火）19:00~21:00

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（終了後は「品菜軒」にて懇親会 ~23:30）

注）護国寺方面の中華料理屋「品菜軒」（TEL: 03-5981-8992）（「カリンカ」「ルン」「景宜軒」「旺達」跡地にあるお店）

【演者】関秀忠（弁護士/NPO 法人サロン 2002 理事）

【テーマ】サッカーの脳挫傷の現況と GK ヘッドギア標準ルール導入の可否（仮題）

【参加者（会員）6名】

安藤裕一（株）GMSS ヒューマンラボ/医師）、岸卓巨（JADA）、斎藤芳（桜丘中学高等学校体育科）、関秀忠（弁護士）、鄭舜圭（一般社団法人 Sport For Smale）、中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（未会員）4名】

金岡天夢（JADA）、岸清馨、高橋昌嗣（歯科医師）、野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会）

【報告書作成者】関秀忠

【概要】

サッカーのGKのいわゆる「1対1」のチャレンジは、常にボクシングの「クロスカウンター」の如き一撃の危機を伴うものであり、また、ゴールポストという金属に向かって横っ飛びするという常時危険な運動を行っている。

2017年10月、インドネシアのプロサッカークラブのゴールキーパー選手がゴール前の激しい激突により顔面・首を負傷し、意識不明のまま死に至るといふ悲しい事件が起きた。しかしながら、その後も2019年に名古屋GKランゲラク選手や柏GK中村航輔選手が、いずれもサイドからのセンタリングに飛び込む類似シーンにおいて、誰にも過失が認められないごく普通に起こり得るプレーでFWと衝突し、脳震盪で救急車で運ばれ、長期離脱を余儀なくされた。

生命や高度障害の危険を伴う脳震盪について、日本サッカー協会も問題意識を持ち、「事故後」に経過観察を行うプログラムを経るガイドラインが設けられている。しかしながら、これらの事故を「未然に防ぐための事前策」は、未だに無いと言わざるを得ない。死者や高度障害の危険が出ているにもかかわらず、いつまでもGKは頭部・顎部を守る術を持たず生身の状態でプレーしている。このままでよいのか？それとも将来、GKは防具の装着が義務付けられ「カスタマイズされたマウスガード」や「カッコ良い新型ヘッドギア」を付けるのが当然となり、後に振り返ったとき、現在の状況がサッカーの歴史の中の「過渡期」であったということになるのだろうか？

本月例会では、①ヴァージニア工科大学によるヘッドギア装着効果の実験結果が報告されるとともに、②マウスガードの専門家である高橋昌嗣氏により、GKがカスタマイズされたマウスガードを装着した際には、動作は勿論のこと、ゴールキーパーによるコーチング（口頭による指示）にも全く支障を来さないことが示された。また、③ラグビーやアメリカンフットボールにおけるマウスガード・ヘッドギアの実情、④学校スポーツにおける頭部障害事例、⑤法的責任の金額インパクト、⑥すね当ての全世界におけるルール化及びビジネスへの発展経緯、等についても報告された。ヘッドギアやマウスガードの装着やその有用性についての議論を高める出発点となり、サステナブルなスポーツ社会を築き上げるために「今は過渡期」かもしれないという気持ちを持って、未来のために勇気のある正しい判断を下していくための研究とプロセスを積み重ねていくことが示唆された。

今後、①脳神経外科医らによる脳震盪の危険性の医学的検証、②脳震盪サンプル（病院・データ）、③スポーツメーカーヒアリング（レガースルール化及び普及をもとにしたビジネス可能性の模索）、④JFA各指針に関する聴取、ルール化に向けた障害と実現可能性、⑤米国におけるヘディング禁止事実の可否確認、⑥ラグビー・アメフト関係者のヘッドギア装着の現状と課題の掘り起こし、⑦GKプレイヤーのヒアリング（実体験・見聞事実その他）などにわたる、幅広い分野への研究方向性が示された。